

Title	モンタペルティ戦争覚え書（下）
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 6 p.275-p.291
Issue Date	1991-12-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79559
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンタペルティ戦争覚え書(下)

米 山 喜 晟

Note sulla Guerra di Montaperti(2)

Yoshiaki YONEYAMA

(本ノートの前半は『大阪外国語大学学報』第74-3号(1987)に掲載され、「第二章 シエナの年代記類に描かれたモンタペルティ戦争」の第一節まで収録されている。第二章の第二節は紙数の都合で省略して、本稿は「第三章」と「結びに代えて」を収録する。

Riassunto

Note sulla Guerra di Montaperti (1)

Premessa: Sul fenomeno di Montaperti-Benevento. Intorno al caso in cui, la sconfitta diventa la causa della prosperità.

Cap. I Ricordi dei cronisti fiorentini, Ricordano Malispini, Giovanni Villani, e Marchionne di Coppo Stefani.

Cap. II La Guerra di Montaperti descritta dai cronisti senesi.

§1. I ricordi di “Kalendarium Ecclesiae Metropolitanae Senensis” e di “Cronaca Senese dei Fatti Riguardanti La Città e il suo Territorio” di Autore Anonimo del Secolo XIV”

Note sulla Guerra di Montaperti (2)

Cap. III Due immagini della Guerra di Montaperti dello studio accademico.

§1 L'immagine come un risultato dello studio filologico moderno di Cesare Paoli.

§2 L'immagine nuova e contemporanea di Enzo Salvini.

Aggiunta: Due problemi di questo fenomeno; 1) L'influenza di questo fenomeno in Italia del XIV secolo. 2) Il fenomeno simile nella storia mondiale. Un esempio di Giappone dopo la Seconda Guerra Mondiale.

第三章 近現代イタリア歴史学におけるモンタペルティ戦争像

第一節 Cesare Paoliによるモンタペルティ戦争の再構成

私達はすでに第一章においてフィレンツェの年代記類が記録したモンタペルティ戦争像を見た後、第二章においてシエナ側のそれを見た。前者においてはシエナの勝利があたかもフィレンツェ亡命者の筋書によってもたらされたかのごとくに描かれており、後者は聖母マリアの奇跡と華麗なパレードによって彩られていて、いずれも実像からは程遠いという印象が否めないだろう。それでは現代歴史学において、この戦争のイメージはどのような姿で捕えられているのであろうか。このような疑問に対しては、トスカーナ地方の歴史に関しては最も権威ある学会誌 *Archivio Storico Italiano* の1990年号の第二分冊（1990 DISP.II）に Enzo Salvini の「モンタペルティ 1260、日時の問題（Montaperti 1260. Un problema di datazione）」¹⁾ という論文が掲載されているので、イタリアの学会における最新のモンタペルティ戦争像を探ることが出来る。だがそれを見る前にイタリア王国が成立して間もない1869年にシエナで刊行された、Cesare Paoli の『史録 モンタペルティ戦争（LA BATTAGLIA DI MONTAPERTI MEMORIA STORICA）』²⁾を眺めておく必要があるようである。何故ならこの作品は、すでに発表されてから一世紀以上経過している緒言4ページ、本文66ページ、資料18ページ、目次等を含めても全94ページの小著に過ぎないけれども、厳密な文献批判に基づく近代歴史学の方法を用いた最初のモンタペルティ戦争の再構成の試みであり、Davidsohn によって多少の疑問³⁾は投げられているものの、前述の Salvini 論文の出現までそれに代わる学問的な考証は現れていないからである。それに Salvini の論文自体 Paoli の研究成果を基盤として書かれているため、それを抜きにしては理解し難いという事情も存在している。それにしても勿論フィレンツェ史やシエナ史の記述の際に避けて通る訳にはいかないので、Davidsohn 等研究者達によって一応の検討はなされて来たものの、昨年モンタペルティ戦争について Paoli 以来約120年ぶりに本格的に論じられたという事実は、その前年にあたる1989年にフィレンツェ発展に関するモンタペルティ・ベネヴェント仮説をイタリア語で発表した⁴⁾（私の論文を含む *Annuario* 誌が実際に刊行されたのは1990年の春なので、両論文はかなり近い時期に発表されている）私には、その影響が不当に低く評価されていると思われる戦争への関心が高まるので、やはり好ましい出来事だと見なし得る。

さて問題の Paoli はまずその「緒言」においてフィレンツェ側とシエナ側の記録の矛盾が大きいことを指摘した後、当時残されているトスカーナ地方の古文書館の文献を利用して両市の記録の真偽を吟味したいと記している。ただしシエナでは1260年の後半期の公文書が全て湮滅している等、決して状況は容易ではないことを率直に認める。それにもかかわらず巻末に加えたものに代表される資料から知られた事実は「私には不毛なものではなかった」⁵⁾と記し、「私は全てに関して完全な筋道を与えることが可能なわけではないが、以下の新しい研究によって多くの疑問が

解明され、多くの矛盾が削除されることをあえて期待したい」⁶⁾という強気の宣言を行っている。

本論は四章より成立っているが、第一章はブリーモ・ポポロ支配下のフィレンツェに対する1254年以降のシエナの関係を論じていて、1260年5月18日に行われたフィレンツェ軍とシエナ軍の対決までを扱っている。1254年勝ち誇るフィレンツェのポポロが率いる軍隊はシエナの領域部を荒らし、それに対抗しきれぬと見たシエナは翌1255年5月31日にフィレンツェとの同盟条約を結び、トスカーナにおけるフィレンツェの覇権を一応受け入れた。その条約の中で特に重要なのは、相手都市の反逆者や亡命者を敵と見なして受け入れてはならないという取り決めで、1258年7月フィレンツェ共和国がギベッリーニ党員を追放し、シエナが彼らを受け入れたためにフィレンツェは二人の使者を送ってこれに抗議し亡命者の即刻追放を要求、シエナがフィレンツェ亡命者を弁護してその要求を拒否した時点でこの条約は無効となり、同盟は決裂して両市は元の戦争状態に戻る。

当然フィレンツェはシエナ領内に派兵してこれを荒らすが、国力の劣るシエナは当時最盛期にあったシチリア王 Manfredi に messer Aldobrandino da Palazzo 等3人の使者を送ってその保護を求め、王も将来のトスカーナ政策の拠点としてシエナを受け入れ、さらに同市との関係を深めるため逆に二人の使者を送る。彼らは翌年4月16日の市民総会に出席して王の希望を伝え、市民を代表して Aldobrandino da Palazzo が法王の意志や教会の方針に反している場合と従来の他市との条約に抵触している場合を除いて、Manfredi 王に対する同市の忠誠と服従は遵守されることを誓約した。かくして1259年5月 Manfredi はルチェーラでシエナを保護下においたことを宣言した。フィレンツェの年代記作者達はこれらの交渉にフィレンツェのギベッリーニ党亡命者が関係していると記したが、Paoli はあり得ないこととしてそれを否定している。だから messer Farinata degli Uberti を主謀者とする一連の謀略は、悉く資料的裏付けを持たないこととして疑問視されている。

しかしこれまでの交渉の結果は、単に Manfredi 王の好意的な言葉をもたらしただけに過ぎなかったもので、同年5月以後に別の二人の使者を王の許に派遣して援軍を要請した。こうしてトスカーナにサン・セヴェリーノ伯 Giordano d'Anglano (父が Manfredi の母 Bianca の兄弟なので王の従兄弟に当る) が率いる一軍を派遣した。フィレンツェ側の年代記類は Giordano 伯の到着を少数のドイツ人の騎兵が皆殺しに会い、シエナが大敗を喫したとされている Santa Petronilla の戦い以後のことで、1260年6月のこととしているが、実際には1259年12月末だったことは、種々の文献によって確実である。同月同隊の受け入れのため計6人もの役人が指名され、そのための経費として500リラ支出されることが「鐘の総会 (Il Consiglio generale della Campana)」で決議されている。この時の伯の兵力について説は分かれているが、Paoli はなるべく早く援軍がやって来るという条件で、ほんの少数の軍人と共にやって来たという Tommasi の説を受け入れる。伯の到着後間もなくグロッセートのコムーネが反乱を起こし、その鎮圧が伯にとつての初仕事となったが、シエナの市民軍が包囲攻撃を準備している間にグロッセートは自

発的に降伏してこの問題は解決した。フィレンツェの脅威は強まり、シエナは各テルツォに祖国防衛のための4人委員会を発足させて対策を講じる傍ら、1260年2月26日には同市と Giordano 伯の連名で Manfredi に援軍を求める使者を送った。

この時期にはフィレンツェに同調した反乱者によってマレンマ地方のモンテマッシの砦が奪われるなど、シエナ領内での反乱が相次いでいた。ただしグロッセートの場合と同様、それらの反乱は比較的簡単に鎮圧されたので、早くもフィレンツェは約三万人の市民軍を編成して第一回目のシエナ領内への遠征を試みている。5月7日に進軍命令が発せられ、7隊編成でシエナの領内に侵入しシエナ周辺部のいくつかの小コムーネにフィレンツェへの服従を誓わせた後、シエナ市の本体に肉薄して、5月17日と18日の二度に亘ってシエナ軍と戦っている。フィレンツェの年代記者達が揃って取り上げている、フィレンツェの亡命者が少数のドイツ騎士達に巨額の給金を与え酒に酔わせて出陣させて全滅させ、思い上がったフィレンツェ軍に Manfredi の軍旗を侮辱させてモンタペルティ敗戦の原因を作った、いわゆる Santa Petronilla（修道院の名）の戦いと呼ばれているシエナ城門外での合戦は、Paoli によると二日間にわたって行われた二つの別の戦いだったとされていて、一回目は San Martino の丘等でのシエナ近郊の防衛戦争、二回目は Camullia 門外の Santa Petronilla 戦争だったが、いずれにも謀略の働く余地は無かった、と断定されている。第一もし万一 Manfredi がそうした謀略でドイツ騎士が犠牲になったと知ったら、とても危険な結果を伴った筈だし、亡命者にそんな指導力があつた筈は無いという、誰にでも浮かぶ疑念を表明している。また Santa Petronilla 戦争の結果についても、フィレンツェ側とシエナ側とではその評価は大きく隔たっていて、ドイツ騎兵が全員戦死したとか、巨額の賃金が払われたというのは真相から程遠く、ドイツ人とシエナ側の輝かしい勝利だったという説すらある程だとし、確実なことはフィレンツェのコムーネ軍に対してドイツ軍の戦力が極めて有効なことが証明されたとする。フィレンツェ軍はそれ以上城壁のそばに止まることを無意味だと考え翌日から移動を開始して、Montelatrone を略奪するなど5～6日間シエナの領域内の各地を転々とした後に帰国した。帰国に際して Manfredi の旗を引きずって侮辱したとされているが、当時は敵を辱めるのが名誉ある行為だと見なされていたので、十分あり得たことである。Paoli によると、この遠征はせつかく大掛かりな動員を行いながら、フィレンツェに大した成果をもたらさなかった。しかし両市に、さらに大掛かりな攻撃または防衛のための軍隊の編成の必要を確信させた点に意義がある、と考えている。

第二章では Manfredi 王の援軍の到来からモンタペルティ戦争の前日までの経過が扱われている。5月末に王の援軍が到来し、「鐘の総会」が各テルツォに3人ずつの係員が選ばれてドイツ軍の世話に当たることが決議される。ドイツ人には Camullia と San Martino のテルツォが割り当てられ、イタリア人には Città のテルツォが割り当てられた。フィレンツェの年代記者達はこの時のシエナへの派兵はギベッリーニ党亡命者達の謀略の成果であると記しているが、Paoli はすでに3月にシエナが Manfredi への使者を派遣していて、その陳情が効を奏した結果

だと見なしている。フィレンツェ軍の撤退後シエナは活発に失地回復を試み、その勢力圏をかなり挽回している。モンテマッシを取り戻した後、フィレンツェと結んで反旗を翻していたモンテプリチアーノの領域を荒らしている。さらに似た動きを示していたモンタルチーノに対しても18人委員会に攻撃の計画を準備させていた。ここでPaoliはフィレンツェの年代記類に記されている、ギベッリーニ党の亡命者達が祖国にたいして仕掛けたとされている罠について検討している。それは彼等が二人のミノーリ派の修道士をフィレンツェに派遣して、シエナでは当時の実力者であるProvenzano Salvaniへの不満が高まっているので、フィレンツェ軍がやって来れば9人の有力市民達がSanto Vitoの城門をあけて迎え入れると伝えさせ、そのための保証金としてフィレンツェに一万フィオリノを払わせたとするものである。それによってポポロの指導者達がゲルフィ党の騎士達の反対を押し切って大軍を編成し、ドイツ騎士多数が守っている危険なシエナの領内に攻め入ったのは、こうした謀略を真に受けたためだという説明が可能になる。Paoliはこの説に関して、Orlando Malavoltiが『シエナ史 (Historia di Siena)』⁷⁾において示した5つの反対理由を紹介する。それは1. Villani等はドイツ騎士軍が3ヶ月しか滞在しないとしているが、それは事実ではない。2. Provenzano Salvaniがシエナの領主だったことはない。3. シエナ人が好んで領内、それも市の城壁の間近まで戦を引き付けることは、ありそうもない。4. フィレンツェ亡命者がこれほど強力な指導力を発揮し得るとは認めがたい。5. シエナのコムーネがこれ程の大軍に市の間近に接近することを許したことはありそうもないとするもので、3.と5. はよく似ている等それほど明快でも説得力があるわけでもない。Paoli自身はいずれが正しいか決着を付けるための決め手となる文献は存在していないとしながらも、せっかくフィレンツェの勢力圏下に入ったモンタルチーノやモンテプリチアーノがシエナに奪回されるのを座視することは、ポポロの名誉にとって我慢ならなかっただろうと推定し、モンタルチーノへの支援がこの遠征の真の目的だとし、したがってシエナ占領の陰謀の存在を否定している。ただしこうした説が年代記者達の完全な虚構だとする説に対して、フィレンツェのポポロの指導者達が(大軍を動員するために?) そうした幻想をでっち上げたとするTommasiの説を紹介し、後者の可能性の方が大きいと判断している。しかしPaoliはフィレンツェ亡命者達がシエナと相談しないで勝手に自国のポポロに対して謀略を仕掛けたり、シエナの有力者であるProvenzano Salvaniの個人的な了解の下でそれを実行した可能性をも一応認めていて、必ずしも完全に否定している訳ではない。

いずれにしてもフィレンツェのポポロ政権は、5月の動員を上回る大軍を編成してシエナ領内に侵入して来たことは確実で、市内および領域部の石弓兵および弓兵1,000、市民の騎兵800、コムーネによって雇われた騎兵500およびポポロの歩兵(前述の兵達を除く15~70才の市民と領域部の住民のはほぼ全員)等を中心として、それにルッカ、ボローニャ、プラート、ヴォルテッラ、サンミニャート、コッレ・ディ・ヴァルデルサ、サンジミニャーノ、オルヴィエート、アレツォ、ジェノヴァ、シエナの亡命者等の援軍が加わった。Villaniは総数が騎兵3,000、歩兵30,000に達

したとするが、Paoli も多くの著者がほぼ等しい数字を記しているという理由で、実数よりほんの僅か少ないだけと見なしている。勿論シエナ側の兵力についても触れているが、騎兵と歩兵あわせて14,500人だったとする説と、3区（テルツォ）の歩兵の総数だけで19,000人だったとする説とを併記するに止めている。他市からの援軍については、フィレンツェの亡命者の他に、ピサからの3,000人やコルトーナからの1,300人の記録もあるとするが、とにかく数の点ではフィレンツェ＝ゲルフィ党の軍勢の方が圧倒的に多数だったことは否定し難い。その大軍はカッロッチョと呼ばれる山車を擁して8月末にシエナ領に侵入し、9月2日に Pieve Asciata という場所に布陣して、シエナの24人委員会に市の城壁を何カ所か崩してフィレンツェの支配に服すべしという趣旨の勧告を行ったとされている。一部の弱気な委員を除く大多数は Provenzano Salvani や Giordano 伯の意向に従って、フィレンツェの要求を拒否すべしと主張し、返答は戦場でおこなえ、という一種の宣戦布告が決議された。翌9月3日には全市に動員令が公布されて、市民達は武装して各テルツォ毎に集合して、市民軍の総指揮に当たったのは、当時の慣例通りポデスタの Francesco Troghisio で、ドイツ軍の指揮は当然 Giordano 伯が担当した、と Paoli は推定している。

第三章は当日の合戦そのものを扱い、第四章はシエナの勝利がもたらした結果を論じている。第三章の冒頭の部分は、戦場の周辺の地形についてのある報告書からの引用である。続いて9月3日の朝シエナを出発した軍勢が、すでに布陣をすませているフィレンツェ軍の真正面に現れてパレードしつつ布陣して、その時同じメンバーが先頭に立つテルツォの制服に合わせて三度上着を着替えることにより、三倍の兵力のように見せかけてフィレンツェ軍を圧倒したという、Ventura⁸⁾その他のシエナの年代記作者が記したエピソードを紹介している。ただし実行には困難が伴いそうだから、とても保証し難いと断っている。さらに3日の夜シエナとその領域の上空を聖母マリアの白いヴェールが覆ってフィレンツェ軍に不吉な予感を与えたとする伝説をも伝え、実際にはシエナの軍勢が小刻みにフィレンツェの陣営に襲撃を加えて安眠を許さず、それが翌日の敗戦につながったのではないかと推理している。次に Ventura が記した⁹⁾ギベッリーニの軍勢の三軍の編成を記しているが、第一隊は Arras 伯が率いる200のドイツ人騎兵と200の歩兵から成る少数の精鋭で、第二隊は王の軍旗を奉じて600のドイツ人騎兵と600の歩兵から成るドイツ騎士軍、第三隊は Aldobrandino 伯等が率い、200のドイツ騎兵、200のシエナの騎士、および各テルツォのボポロから成り立っていると述べている。Paoli 自身フィレンツェの亡命者や他の都市からの援軍の所属が記されていない等、かなり不備なものだということを認めている。確かに数の点だけを見ても、各隊は余りにもアンバランスである。なお Arras 伯の率いる隊は「サン・ジョルジョ」の合言葉の下に、フィレンツェ軍に対して左翼から奇襲攻撃をかけるため、ピエーネ川に沿って Monselvoli の丘を迂回したとされている。

いよいよ9月4日の朝、たつぷりと上質の食事を取ったシエナ軍は攻撃のために Repoli の丘から Cortine の平地へ駆け下り、Monselvoli へと向かった。対するゲルフィ軍はリーダーの

未熟とフィレンツェ軍に加わっているギベッリーニ党員の裏切りという二つの大きな傷を抱えていた。しかしフィレンツェ側は決して簡単に崩壊した訳ではなく、陣営の位置が高いことと、日光を背にして戦っていることから、当初は有利に戦うことが出来たはずだという。Arras 伯の率いる軍勢が左翼から奇襲を加えて、彼等を高地から追い落とした時に地形上の優位は失われた。その混乱の最中にダンテが歌った¹⁰⁾Bocca degli Abati 等ギベッリーニ党員の裏切りと逃亡が起こった。しかし Paoli に言わせると、フィレンツェ側の陣営は決してそれほど簡単に敗北した訳ではなく、モンタベルティの砦にひしめき合う等の長い抵抗の後に、虐殺されたのだらうと推察している。なおフィレンツェ側の犠牲者に関しては、フィレンツェの年代記者達によると死者2,500～3,000人、捕虜1,500～4,000人であるのに対して、シエナの作者達によると死者10,000人、捕虜及び負傷者は20,000人以上と大きな隔たりがあることが、指摘されている。残念ながら Paoli にも、どちらが真相に近いのかを推定する手掛かりはないようである。他方シエナ側の犠牲者については、Malavolti が伝えている死者は4人の隊長を含む約600人、負傷者400人以上という数字を示して、この他にこれと比較対照する数字が残されていないと記している。死者が10,000対600では余りにも差が大きすぎるような印象は否めない。24人委員会の人々は Marescotti (今日の Saracini) の塔の上に見張り台を設けてそこに集まり、Cerreto Ceccolini は太鼓で塔の下の人々や老人達に戦況を伝え、塔の下の人々は地面に跪き両手を天に向けて祈り続けたという。やがて勝利を得たボポロや外人達が大量の戦利品と捕虜を伴ってカッロッチョを中心に帰国。先頭には先日降伏を勧めに来た使者の一人が、両手を縛られて後ろ向きに驢馬に乗せられて入城して来た。一同はまずドゥオモに参って感謝の祈りを捧げた後、Santo Cristofano 教会で戦利品をコムーネに引き渡した。

第四章では勝利のお祭りや記念の銀貨鑄造、勝利の地での聖ジョルジョ教会建設等が記され、多くの捕虜が死んだこと、モンタルチーノとモンテプリチアーノの服従、フィレンツェ市民の苦しみと亡命、エンポリにおけるギベッリーニ党の会議と実現しなかったフィレンツェ破壊の提案、トスカーナにおけるシエナの覇権の成立、しかしベネヴェントにおける Manfredi の戦死とそれに伴うトスカーナにおけるギベッリーニ党支配の終わり等が記録し検討されている。

なお巻末に参考資料として、第一部 外交文書、第二部 年代記、の二部分より成る付録 (pp.75～92) が追加されている。第一部は以下の5点より成る。I. 1255年7月31日付のフィレンツェとシエナ間で結ばれた2つの和平協定。II. 1259年10月7日付の Manfredi 王がシエナ人あてにポデスタとして messer Francesco Troghisio を派遣したことを伝える書簡。III. 1260年5月17日付のフィレンツェのポデスタおよび隊長達による敵の捕虜についての宣言。IV. 1260年5月19日付の Santa Petronilla の戦いの翌日 San Cristofano で開催されたシエナのコムーネの総会の議事録。V. 14世紀の後半、1260年の直後に聖ジョルジョに感謝して2つの教会を建立することを決めたシエナの憲章の条項。第二部は I. 14世紀の無名作者の『シエナ年代記』(筆者が本論の(上)で紹介したもの)の抜粋と、II. 14世紀の『ピサの年代記』の抜粋、より成る。

第二節 Enzo Salviniによるモンタペルティ戦争の新しいイメージ

さていよいよ E. Salvini の「モンタペルティ 1260、日付の問題」に取り掛かる。この論文はタイトル通り問題の合戦が行われた日時の問題を扱ったものであるが、結局自説の証明のためにこの戦争について全面的に検討し直さざるを得ず、結果的には今日のイタリア・アカデミズムにおけるこの戦争に関する常識を推測することをも可能にしてくれる。Salvini はまずトスカーナにおけるフィレンツェの覇権がほぼ確定した14世紀に、ようやくシエナでモンタペルティ戦争に関する記録が集められ論じられ始めるが、時間的な隔たりが真相の解明を困難にし、たとえばシエナのある年代記ではこの戦争はフィレンツェ軍がモンタルチーノの補強と援助に赴いた帰途の出来事だとする説がある。しかしこの戦争に関して最も信頼し得る資料である『モンタペルティの書』¹¹⁾には9月3日にはフィレンツェ軍はシエナの北方の Pieve Asciata に居たとされているので、モンタルチーノからの帰途ではなかったことは確実だとされている。Salvini はシエナの年代記類はこうした根拠が不確実で価値の乏しい情報で成り立っていることを指摘した後、「重大なことは、それらが傑出した近代の歴史叙述家までを、誤りに導いたことである」¹²⁾と記し、その一例として前節で紹介した Paoli の「3日から4日にかけての夜、シエナ人達はフィレンツェ達に休息を許さないようなやり方で、様々な地点で小さな攻撃を継続的に行うことによって、フィレンツェ人の陣営を混乱させた。そして彼らを非常に悩ましたので、シエナの年代記作者の言葉によると、彼らは土曜日の夜明けごろにはひそかに出発の準備をした」¹³⁾という一文を挙げている。こうした日時についての誤解は、Davidsohn の『フィレンツェ史』¹⁴⁾や L. Douglas の『シエナ共和国の政治社会史』¹⁵⁾にもそのまま残っていて、たとえば後者には「(9月4日の早朝、シエナ人達は) 眠りこんでいるゲルフィ軍に不意に襲いかかって、彼らを恐怖の念で充たすために、良く装備された人々の小部隊を次々と送り出した」¹⁶⁾という文章が認められるという。これらの記述は、中世以来の年代記類においても、近現代の学術的な著書においても、フィレンツェの軍隊がモンタペルティ戦争の前日に当たる9月3日には、戦闘のあったアルビア川の近くに到着していたという説が疑問の余地なく受け入れられていることを示している。しかし既に見た通り、フィレンツェに残されているこの戦闘に関する最も信頼出来る資料は、そうは記していない。もしも資料の証言に忠実に従って、この戦闘を書き直せばどういう結果が生じるであろうか。この論文はこうした問題意識に立って論じられているものである。

ここで Salvini は問題の資料集『モンタペルティの書』について解説し、まずその作成者である公証人に関する事実から説き始める。13世紀のフィレンツェには公証人が500人以上も存在していて、法律や裁判や契約に関係のあるラテン語による文書の作成に当たっていたが、コムーネによる軍隊の動員に当たっても、100人以上の公証人が徴用されて、兵員名簿の作成から賃金の支払い、武器の分配から食糧の調達や駄獣の登録等に至るまであらゆる分野で、担当の係官のかたわらにいて、微妙な任務を担当し続けたとされている。モンタペルティ戦争に関しても、当然

彼らはそうした業務を担当していて人員の登録や物資の調達を記録しているだけでなく、フィレンツェ軍の遠征に従軍して校訂者 Paoli によって中世では唯一の例だと見なされている「行程に関する公文書 (Archivio Viatorio)」¹⁷⁾をも書き残した。ただしその記録は9月3日までで中断していて、当然ながらその翌日の運命の日について記録されることはなかった。それから一連の文書は1889年に前節の論文の著者 Cesare Paoli の手で校訂されて刊行された。Paoli はその文書がたどった運命についても記しているが、それによるとこれらの書類はシエナ人によって戦場から持ち帰られ、一冊にまとめられて勝利の記念品としてシエナの古文書の中で大事に保管されていた。ところが1570年シエナがトスカーナ大公国によって併合された後、Federigo dei Conti di Montauro がそれを見付けて領主 Cosimo I dei Medici に返却、その後フィレンツェの古文書保管所で二枚の木の板表紙と革の背表紙で装丁されたまま眠り続け、ようやくイタリア統一後の1872年、当時の国立フィレンツェ古文書館監督官だった Cesare Guasti がそれを若い同僚 Paoli に託して整理、分類、転写等の作業を依頼、1889年 Paoli の編集および校訂によって刊行されるに至って居る。従って Salvini は、前節で紹介した1869年の Paoli の論文を1889年に同じ Paoli が刊行した資料を用いて批判し新説を唱えている訳である。なお Paoli は1869年の論文を執筆していた当時も同資料について言及、活用していて、決して無視していた訳ではないが、おそらくまだ未整理の箇所が多すぎて、Salvini のように問題を日付の一点に絞って論じ、従来の通説を書き直すことはとても考えられなかったのかも知れない。

要するに Salvini は、その資料でフィレンツェ軍が9月3日に Pieve Asciata に居たとされている以上、アルビアの平地に達していた筈がないという論理的推論から出発する。さらにそれを補強する資料として、同資料集に Paoli が付けた「日時別索引」¹⁸⁾を挙げ、そこでは8月28日より9月3日にかけてサン・パンクラッティオ区(セスト)の人々の編入と閲兵が成されたとして、8月26、27日は San Donato in Poggio の陣地、8月28、29、30日は S.Casciano の近く、9月2、3日は Pieve Asciata の陣地と、それぞれの場所に一応配分されている事実を指摘、閲兵は昼間、全隊列を編成して行っているはずだから、フィレンツェ軍が Pieve Asciata を出発したのは夜間だったに違いない、と Salvini は推理する。また夜間の移動は決して珍しいことではなく、その前の宿营地 San Sano から Pieve Asciata までの移動も「前日9月2日木曜日の夜間に (nocte die jovis precedentes 11 Septembris)」¹⁹⁾行われたことが明記されているとし、これは Salvini によると、敵地を進まなければならない場合の安全確保という明白な動機に基づいた行為なのである。

こうして移動は夜間に行われたという立場から、フィレンツェ軍の動きを構成し直すと、出発は21:00時頃で、距離は約16キロ、今よりもずっと樹木が多い丘陵地帯だったという点やカッロッチョ(旗車)を引いてアルビア川の橋をわたったことを考慮すると、4～5時間はゆうにかかるものと思われる。すなわち先頭部隊がアルビアの小盆地に到着したのが午前2～3時だとすれば、末尾の部隊はようやく5時頃に到着しただろうと推定している。Salvini はフィレンツェ軍の兵

力は、Davidsohn が推定しているような70,000人などといった大規模なものでは決してなく、他のゲルフィ都市の援軍を加えてもせいぜい20,000人程度だとして、彼らは一列縦隊で進軍したのではなくて、4～5人の小グループを作って前進したはずだとしている。Salvini はこうした推定を可能にしてくれたのは判事兼公証人 Cavalcante Burnellini の記録だとして、もしそうでなくてシエナの年代記類が伝える通り9月3日にモンタペルティの平原に着いていたとすれば、最低24時間は休息を取って海拔230メートルの Monselvoli の丘（シエナ市自体322メートルの高地に位置していて、その西方にはゆるやかな起伏をなして小さな丘が連なっている）に立派に陣を築いたはずで、3日に動員されたシエナ軍が Repoli の丘（210メートル）に陣を築く様子を偵察していたに違いないし、ドイツ騎兵軍が無傷でアルビア川を渡渉するのを手をこまねいて傍観していたはずはないとしている。ギベッリーニ党員の裏切りと共に最大の敗因の一つと見なされている、シエナ軍の一部精鋭の迂回による Monselvoli 山の奇襲攻撃は、もしフィレンツェ軍が先着しておれば、決して成功しなかっただろうと考えられている。しかしようやく9月4日の早朝に全軍が戦場にたどり着いたフィレンツェ軍には、ほとんど選択の余地がないまま、おそらく5～6時のころ早急に作戦会議を開き、Repoli 山に陣取っているシエナ軍の主力に対決しなければならなかった。こうした状況であれば、待ち伏せに近い形での奇襲攻撃も十分成立し得ただろうと、Salvini は推測している。

ここで Salvini は一度視点を転じて、1251年以来のシエナとフィレンツェの間の外交関係に戻し、前節で見たのとはほぼ同じ両者の決裂までの過程をたどっているが、フィレンツェのこの時の遠征の目的は、シエナ市それ自体ではなく（したがって Villani 等フィレンツェ年代記作者達の伝えている、ギベッリーニ党亡命者の謀略は無視されていると、見なし得る）、『モンタペルティの書』の記述に従って、シエナのほぼ南方に位置しているモンタルチーノだったとされている。この都市がシエナの勢力圏内にありながらフィレンツェと同盟したために、シエナ軍によって周辺を荒らされ、フィレンツェの援助と補強を求めていたという事情は、モンテプリチアーノの場合とはほぼ等しく、やや方角は異なるが両市が併記されている場合も見られる。Salvini は単にモンタルチーノ援助のための遠征であれば他にもっと安全なルートがあったのだが、ポポロの一部にギベッリーニ党の影響が浸透していたために、危険なルートが選ばれたものと推測している。フィレンツェの年代記類が伝えている、危険を指摘して反対するゲルフィ党の貴族達とあくまで既定の方針を押し付けようとするポポロの指導者とのやり取りは、本来は遠征それ自体の是非に関するものとして記されていたが、Salvini は遠征の経路に関する論争であったかのごとく見なして、それが存在した可能性を受け入れている。残念ながら『モンタペルティの書』にはその部分が欠けているために正確な出発の日には不明であるが、フィレンツェ軍はカッロッチョと共に8月20日または21日にフィレンツェを出発、すでに見たとおりあらかじめ定められた各々の陣地で新しい（特に領域部からの）兵員を編入し、さらにモンタルチーノに補給したり自軍の必要を充たすための食糧や武器を積んだラバを追加しながら進んだ。そのためにいくつかの場所で

宿営したが、文書に従ってさらにくわしく記すと、San Casciano in Val di Pesa(8月22日、23日)、San Donato in Poggio(同23日、24日)、Ricavo(同25日、26日、27日、28日、29日)、San Sano(同30日、31日、9月1日)、そして最後がシエナ領内のpieve Asciata(9月2日、3日)の5箇所だとされている。さすがにフィレンツェ領域内の最南のSan Sanoの陣地からの行進は慎重で、既に見たとおり1日から2日にかけての夜間にアルビア川をわたってシエナ領内に入り、前の陣地から直線距離にしてわずか4キロの所に布陣して、2日間滞在している。だからモンタペルティにおいても同様の夜間行進と布陣が企画されていたものとSalviniは推測している訳である。ここでSalviniはフィレンツェ軍の編成と装備について触れ、1250年のプリーモ・ポポロの編成後は、全ポポロは当初は20、後に16の旗(gonfalo)の下に属している各隊(compagnia)に編入され、15才から70才までの全ての男子は兵役に応ずる義務があった。領域部の住民の場合も勿論同様の義務があって、96の教区のいずれかに編入され、市内で個々の隊が6セストに編成されたのと同様、同名の6セストに編成され、それぞれが連合(lega)として戦った。騎士の場合はほぼ万国共通の基準が通用する筈で、特に明記する必要はなさそうだが、ポポロの武器に関してはコムーネ毎にいろいろな特殊性が考えられるが、フィレンツェのプリーモ・ポポロに関してSalviniは二つの説を伝えている。その一つは各隊に石弓が20、槍が20、大斧が20配備されていて、最低限それだけの武器は確保されているが、それ以外は斧、鉞、ナイフ等を各自持参するというもので、その場合ポポロの戦闘能力は著しく不揃いで、全体としては弱体なものとなる。もう一つの説は、ポポロの三分の一は石弓または普通の弓、三分の一は槍または投げ槍、三分の一は剣を持ち盾又は大盾を持参する義務があったとするもので、これだとかなりの戦闘能力が期待出来るだろう。その他鉄の袖の付いた革の胸当ての着用等様々の義務があり、石弓が二種あった等武器に関する記述がなされ、騎士の装備に関しても一応言及されている。だがいずれにせよ、私の印象ではSalviniはフィレンツェのプリーモ・ポポロの戦力に関してあまり高い評価を与えていないように感じられてならない。しかし少なくとも同時代のフィレンツェ側の記録から見る限りでは、その戦力はもっと高く評価されていたように感じられる。ところでモンタペルティ戦争自体におけるフィレンツェ軍の正確な戦力についても、Salviniは総勢70,000とするDavidsohnどころか、歩兵30,000、騎兵3,000としたVillaniの説をも過大と見なし、精々総数で20,000だろうと推定しているのであるが、その根拠は先に見た5つの宿営地に極めて狭い空き地しかなく、20,000人を収容することすら困難だという理由を挙げている。他の考え方が全く不可能なのかどうか、検討の余地はあるように思われるが、Salviniが文献のみによる実証から一步踏み込んで当時の記述を検討している点は評価すべきものと思われる。

シエナの状況に関しては、Salviniは前節で見たPaoliの成果をほぼ全面的に受け入れていると見なすことが出来るだろう。強いて言えば、かつては単純にドイツ人騎士とされていたGiordano伯の軍隊が、実際にはギリシャ人やルチエーラの回教徒の兵士をも含む混成軍であったことを指摘している点や、Paoliがシエナ側の資料を重視して同年5月のフィレンツェ軍とド

イツ騎士軍を含むシエナ軍の対決をほとんど痛み分け程度に評価したのに対して、Salvini はフィレンツェ年代記類に従いドイツ騎士軍が手痛い教訓を受けたと記している点が、微妙な違いだと言えなくもない。なおいよいよモンタベルティ戦争が迫ると、市当局はドイツ騎士軍に対し二倍の給金を支払うと約束して、Salimbeni 家の協力で118,000フィオリノという莫大な資金を調達したことも記されている。フィリオーノ金貨は勿論フィレンツェの貨幣で、その金貨の鑄造が始まったのは1252年のことなので、当時のフィレンツェの経済力をまだ離陸以前とする私の立場を見直す必要があるような印象を与えるかも知れないが、当時は一定の手数料を払い貴金属を持ち込んで鑄造させるという方法が普通に行われていたの²⁰⁾であり、この巨額のフィオリノ金貨は両国が平和だったころ Salimbeni 家が金を持ち込んで鑄造させた可能性が大きく、むしろこの時期のシエナの金融業者の巨大な経済力の証明と見なすべき出来事なのである。

シエナ軍の編成に関しても、3 隊から成り立っていたという Paoli の説はほぼ全面的に踏襲されていて、特に「ひそかに秘密の道を」²¹⁾「Monselvoli の丘を迂回して」²²⁾進む可く編成された第一隊の存在が重視されている。これに関し Salvini はすでに何度も触れて来たのだが、さらにもう一度ダメを押すかのように、「このような《罨》（これこそフィレンツェ軍潰滅の第一にして真の原因だったのだが）は、明らかに9月3日から4日にかけての夜、つまりフィレンツェ人達がまだ Pieve Asciata から行軍の途中で、Arras 伯の部隊がアルビア川を渡るのを妨害するために存在していなかった間に、準備されたのだ。その罨はその後あらかじめ打ち合わせされた合図（「サン・ジョルジョ」の叫び声）と共に、不意に Monselvoli のフィレンツェ陣営の側面に飛び出させるために、Monselvoli（230メートル）の丘のふもとの200メートル以下のあたりを流れる急流 il Borro Rigo に騎兵や歩兵を隠すことによって展開されていた。そうした作戦は確実にフィレンツェ人に東方へ、つまり下に広がる、Biena、Malena、および Arbia の急流の間に含まれる平地へ逃げ場を求めさせたに違いない。そしてそこでは彼らを攻撃するために、全ドイツ騎士軍を有利に利用できたはずである」²³⁾と説明を加えている。Salvini はシエナ軍の装備等についてははっきりしないが、数の点ではかなり劣っていたことは確実である。たとえば騎兵の数については、全体で約1,000騎の外人が2つのテルツォに割り当てられ、イタリア人が残りの1テルツォに割り当てられていることから、どの程度の規模だったかを推定できるとし、また徴兵の義務がフィレンツェとほぼ同じ15才〜70才の男子全員に課せられているために、領域が狭いシエナでは市民軍の規模が劣っていたことは確実である。しかし Salvini は熟知した場所で、有利な戦闘が可能なように戦場を選ぶことが出来たという地の利と、既に14日もの間野宿を続けて来たフィレンツェ軍を前日シエナを出発したばかりの軍が迎え撃つという条件、特に疲労度の違いという2つの点が、数の違い等の不利を遙かに上回る利点をシエナ軍に与えたのだと説明している。さらに彼はそれぞれの川や丘がこの戦闘において有したと思われる意味を検討した上、9月4日の払暁シエナ軍に直面した時、フィレンツェ軍の指揮官が発したと思われる命令を推理する等、歴史の論文の範囲をこえた問題にまで踏み込んで論じている。Salvini 自身が論文の末

尾の近くで「確実な証言は全く欠けているのに、戦闘自体の諸段階を再構成しようと試みるのは不遜で馬鹿なことだろう」²⁴⁾と述べているが、既になんかなり大胆すぎる推論に走っているという印象が否めないだろう。要するに彼は今までほとんど無視されていた、『モンタペルティの書』の中の9月3日の宿営地の地名とその前々夜の夜間行軍の記録とを基にして、シエナの年代記類に基づいてPaoliが再構成したのとは全く異なったモンタペルティ戦争のイメージを織り上げたわけである。

これら二つのイメージの内でもどちらが真相に近いかを決定するための手掛かりは、残念ながら私にはない。ただシエナの年代記に基づくPaoliのイメージがあまりにも様式化されている点にはかねてから不満があった。その点フィレンツェの年代記類では、市内の裏切り者が門を開いてくれることを期待して、油断しながら待機していた所へ不意にサント・ヴィート門から飛び出したドイツ騎兵軍が襲い掛かったために、大軍が総崩れしたと説明されていて、シエナからモンタペルティまでの距離が8キロ²⁵⁾もあって不意打ちというには時間が掛かり過ぎるという点を除くと、より納得し易いという印象を持っていた。それにドイツ騎士軍の襲撃の場合、その程度の距離は大して問題にならない、と言えるかも知れない。フィレンツェ人の意外な展開への驚きや、不意打ちだという印象に関しては、フィレンツェの記録の方が時間的に近い上、敗者のみが知っている真実を伝えているために、やはり無視し難いという印象を受ける。ギベッリーニ党亡命者による陰謀の伝説は、そうした敗戦時のフィレンツェ人の強烈な印象を基盤として作られている可能性も考えられるだろう。新しく提起されたSalviniのイメージは、少なくとも意外感や不意打ちの印象とは良く調和していると言えそうである。また確かに日時に関してSalviniが指摘した事実は、この戦争に関して決定的に重要である。しかしそれ以上に推測を進めても、たとえば奇襲のための迂回一つ取っても、フィレンツェ軍の動きがうまく予知できない限り、それほど効果を発揮できたかどうか怪しい等、疑問の余地が余りにも多いことは、Salvini自身が指摘した通りである。

結びに代えて

最後にモンタペルティ―ベネヴェント現象に関連した二つの問題に触れて、将来の課題を示しておきたい。

その一つはこの現象がその後のイタリア全体に及ぼした影響である。フィレンツェ経済の飛躍の影響というところあまりにも漠然として論じ難いけれども、さらに問題を限定して政治―軍事的側面に限って考察する場合、かの悪名高い傭兵制の確立と密接に関係していることは否定し難い。しかしこの制度自体Machiavelliのように単純にその弊害ばかりを眺めるのでは公平を欠くのであり、均衡の時代としていわゆるルネサンス文化が成熟した概して平和な40年間も、まさにこの制度と表裏一体の関係にあったことは否定できない事実なのである。結局フィレンツェの経済力

がこの均衡を支えた重要な要素だったことは確実であり、そうした均衡政策は Cosimo 一人の発明ではなくて、フィレンツェのコムーネの伝統方針と見なし得るものであり、その由来をさかのぼると、13世紀後半の繁栄にたどり着くと考えても差し支えないのである。したがっていわゆるイタリア・ルネサンスの基盤となっている平和的均衡社会の起源はモンタベルティ・ベネヴェント現象にあると見なし得る。ただしこれまでこうした発想に基づいてこの時代を概観した研究者は皆無といわねばならない状態なので、様々な側面から緻密な裏付けを行う必要がある。

二つ目は世界史上におけるこれに類した現象に関する考察である。たとえば第二次ポエニ戦争後、軍事力による発展の可能性を失ったカルタゴに未曾有の経済的繁栄が訪れたとされている等、これは決して孤立した現象ではない。しかし少なくとも20世紀まで敗戦によって生じる損害が、この現象から生じる利益を上回るのが当然であった（カルタゴの場合も結局そうなった）時代には、この現象の利点は極めて希にしか現れなかった。ところが20世紀、少なくとも指導者の間には一応人権思想の普及したアメリカによって占領された第二次世界大戦の敗戦国では、いずれも類似の現象が生じており、イタリアではその繁栄に「奇跡の」という形容詞さえ付けられた。だが恐らくもっともこの現象の恩恵に与ったのは日本であった。だから基本的に日本人が世界から要求されている役割とは、この時代のイタリアにおけるフィレンツェの役割に近いといえるのである。（終）

註（上の部）

はじめに

- 1) P.アントネッティ著中島・渡部訳、フィレンツェ史、東京1986、p.5参照。
- 2) H. Baron, *The Crisis of the Early Italian Renaissance*, Princeton New Jersey 1966.
- 3) 拙稿、中世フィレンツェの知的生産性飛躍の時期と契機、『大阪外国語大学学報』第六十九号（1985）pp.57-77 所載。
- 4) 両者は共にモンタベルティ敗戦後亡命生活を余儀なくされたとされているが、近年の研究では Malispini の業績に関して、疑問視する見方が強くなっている。拙稿、モンタベルティ・ベネヴェント仮説より見たダンテとその時代、『大阪外国語大学論集』第5号（1991）所載、第一章 モンタベルティ・ベネヴェント仮説とダンテの『神曲』、およびその注1)、2)、3)、5)、7)参照。先人の記録を臆面もなく採り入れる Villani のやり方から考えると、Malispini の存在は否定されても、何らかのモンタベルティ敗戦の記録者の存在は想像し得るのではないか。
- 5) G. Villani, *Cronica*, Roma 1980 (Firenze 1823), T. VI, pp.184-5. 清水廣一郎、中世イタリア商人の世界、東京 1982、第二章 読み書き算盤参照。
- 6) 一定の条件下で敗戦国が経済的に優位に立つ可能性は常に存在した筈だが、特に第二次世界大戦後に著しく、西独やイタリアでも認められた。
- 7) それは傭兵制の定着による出費の増大や周辺の軍事大国の脅威で、すでに我が国でも湾岸戦争で類似の事態を一部体験済みであり、その重大化は将来十分予想し得る。

第一章

- 1) はじめに、注5)参照。
- 2) Storia Fiorentina di Ricordano Malispini col Seguito di Giacotto Malispini, Ridotta a migliore lezione e con annotazione illustrata da Vincenzo Follini, Roma 1976(Firenze 1816)。
- 3) Cronica Fiorentina di Marchionne di Coppo Stefani, a cura di N.Rodolico, in RR.II.SS.T.XXX, Città di Castello 1905。
- 4) R.Malispini, op.cit., Cap.CXXXIX, p.115。(これは注2)と同じ)
- 5) Id.,Cap.CXL,p.115。
- 6) Id.,Cap.CXLVIII,p.122。
- 7) Id.,Cap.CXLIX,p.122。
- 8) Id.,Cap.CL,p.123。
- 9) Id.,Cap.CLII,p.124。
- 10) Id.,Cap.CLVII,p.126。
- 11) Id.,Cap.LIX,p.127。
- 12) Id.,Cap.CLX,p.128。
- 13) Id.,p.129。
- 14) Id.,Cap.CLXIII,p.130。
- 15) Id.,Cap.CLXIV,p.131。
- 16) Id.,p.131。
- 17) Id。
- 18) この現象に関しては、E.Fiumi, Fioritura e decadenza dell'economia fiorentina, Parte I, in "Archivio Storico Italiano", Firenze 1957および A. Saponi による一連のフィレンツェの家族企業に関する研究 (Studi di Storia Economica, Voll.I-III, Firenze 1940-67に所載) でかなり明らかにされている。拙稿、フィレンツェ発展における Carlo I d' Angiò の役割について、『大阪外国語大学論集』第1号 (1989) 所載、第二章および Y.Yoneyama, Sugli effetti della sconfitta di Montaperti—Un momento dimenticato della prosperità di Firenze del Duecento, in "ANNUARIO" XXIII 1987-1989, Roma 1990, Cap.II。
- 19) R.Malispini, op.cit., Cap.CLXVI, p.132。
- 20) Id., Cap.CLXVII, p.132。
- 21) Id., Cap.CLXVIII, p.133。
- 22) Id。
- 23) Id., Cap.CLXX, p.135。
- 24) Id。
- 25) Id., p.136。
- 26) Id。
- 27) Id., Cap.CLXXI, pp.136-8。
- 28) Id., Cap.CLXXII, p.139。
- 29) Id。
- 30) Id., Cap.CLXXIII, p.140。
- 31) Id., Cap.CLXXIV, p.140。
- 32) Id。
- 33) Id., p.141。
- 34) Id。
- 35) Id。
- 36) G.Villani, op.cit., Libr. VI, Cap.LXXXV, p.122-3. なお Marchionne di Coppo Stefani, op.cit.,

p.49, Rubrica CXXIX が該当する箇所だが、フランスで大儲けしたという記事は見当たらないので、Villani 一人の証言に止める。

37) G.Villani, op.cit.,p.123.

第二章

1) In “Cronache Sanesi” a cura di A.Lisini e F.Iacometti, in RR.II.SS.,T.XV,Parte VI,Città di Castello ?,pp.1-38.

2) Id.,pp.39-172.

3) 第三章以下の近現代の歴史家達の見解参照。

4) これは祈禱を行うため重要人物の命日や重大事件の発生日月日を一月から順に並べたもの。

5) Id.,pp.25-6.

6) Id.Prefazione di A.Lisini,p.XIII.

7) Id.

8) Id.,Cronaca Senese di Autore Anonimo, p.56.

9) Id.

10) Id.,p.57.

11) Id.,pp.57-59.

12) Id.,p.60.

13) Id.

14) Id.p.61.

15) Id.以上で（上）の注終了。

注（下の部）

第三章

1) E.Salvini, Montaperti 1260.Un problema di datazione, in “Archivio Storico Italiano”, (1990 DISP.II), Firenze 1990.

2) C.Paoli, LA BATTAGLIA DI MONTAPERTI MEMORIA STORICA, Siena 1869.

3) R.Davidsohn, Storia di Firenze, II Guelfi e Ghibellini, Parte I Lotte sveve, T.II,pp.689-696. 多少の違いはあっても、基本的に Davidsohn も Paoli に従っていると見なし得る。

4) Y.Yoneyama, op.cit.

5) Paoli, op.cit.,p.5.

6) Id.

7) 出典は以下の通りとされている。O.Malavolti, Historia di Siena, Parte II,a.c. 14-5.

8) 同上。Cronaca di Niccolò di Gio. Ventura, in “Miscell. Senese del Porri”,p.50.

9) Id.,pp.57,58.

10) Dante Alighieri, INF.,XXXII 78 sgg.

11) A cura di C.Paoli, Il Libro di Montaperti(A. MCCLX), Firenze 1889, p.338. “item nocte die iovis precedentis ija septembris, et die veneris veniente, in campo communis florentie posito apud plebem de Assiata,”という一文こそ本論全体の基盤である。

12) Salvini, op.cit.,p.254.

13) Paoli, LA BATTAGLIA,p.52.

14) Davidsohn, op.cit.

15) L.Douglas, Storia politica e sociale della Repubblica di Siena,Roma 1969,p.93.

16) Id.

17) Salvini, op.cit.,p.256.

- 18) C.Paoli, *Il Libro*, p.395
- 19) 注11)で引用。
- 20) C.M.Cipolla, *Il fiorino e il quattrino*, *La politica monetaria a Firenze nel 1300*, Bologna 1982, p.56.
- 21) Salvini, *op.cit.*, p.270.
- 22) Id.
- 23) Id.
- 24) Id., p.275.
- 25) *La Nuova Enciclopedia Universale Garzanti*, Milano 1982, p.928. (下)の注終了。

(1991. 9. 11 受理)